

いてのデータ解析としては、これら諸項目間の関係の構造に焦点を合わせた分析こそが適当といわなければならないのである。

2. データの煮詰め方

質問紙調査 (Survey Research) のデータ解析においては、「木を見て森を見ざる」という結果にならないことが重要である。そのために、まず調査データの全体的な構造や連関を捉えたいうえで、つぎにデータの特定の側面に焦点を合わせて、よりインテシヴな分析を試みるという仕方です。データを煮詰めていくのが、データ解析の常套手段となっている (鮑戸弘『社会調査入門』、日経新書、1971年、135頁)。ここでは、今回の調査のデータ解析において、このような分析の作業を具体的にどのように進めていくかについて述べていきたい。

さて、すでに述べたように、今回の調査ではナショナル・アイデンティティを構成する、あるいはそれと関連すると考えられる質問諸項目が用いられている。これは、別の言葉でいうならば、ナショナル・アイデンティティという次元——「次元 (dimension) とは、一般に属性 (attribute) ・特性 (trait) ・標識 (characteristic) ・要因あるいは因子 (factor) ・変数 (variable) ・変量 (variate) などといわれるものの総称である」(安田三郎、原純輔『社会調査ハンドブック』[第3版]、有斐閣双書、1982年、18頁)——について、調査票の作成に参加した ISSP のメンバーが、先行研究からのさまざまな知見・法則・理論の inventory と独自の広く深い洞察にもとづいて、さまざまに細分化を試みた結果ということもできる。このように調査企画の段階で行われたナショナル・アイデンティティという「次元の細分化」の作業と、このような細分化の作業にもとづいてはじめて可能になったナショナル・アイデンティティの諸側面の測定の作業の結果を、再びデータ解析の技法を用いて合成することをとおして、ナショナル・アイデンティティの全体像の再構成を試みる、つまり「次元の総合化」を試みる、というのがここでの課題である。

さて、このような課題にこたえるデータ解析の

一つの技法として因子分析法 (Factor Analysis) がある。いうまでもなく、因子分析法は共変する傾向を含んだ諸変数を数学的に操作することによって、より一般的な少数の共通因子を抽出する方法である。ここでは、この技法を、すでに進めてきた今回の調査の質問諸項目の内容についての一つの結論、つまりそれらの質問諸項目はその方向 (positive↔negative あるいはプラス↔マイナス) については相異があるものの、いずれもナショナル・アイデンティティという理論変数を構成する、あるいはそれとかがわり合いのある経験変数であるという仮説を検証するために援用してみようということである。

では、その因子分析の具体的な手順はというと、それはつぎのようなものである。

①調査が実施された22か国 (ドイツを西ドイツと東ドイツに分けるなら23か国) のデータをすべてひとまとめに分析にかける。

②すべての質問項目について、「わからない」=8、「無回答」=9、「非該当」=0、として missing value の指定を行なう。

③それぞれの質問項目の内容を吟味し、その rank order の方向を統一するために、Q5b (V23)、Q10a (V47)、Q10c (V49)、Q23 (V71)、については、(1=5) (2=4) (3=3) (4=2) (5=1) というように RECODE を行なう。

④バリマックス回転は行なわない。

⑤因子分析法では、まず第1因子を求め、つぎのその第1因子とはまったく相関をもたず、第1因子によっては説明されなかった部分をできるだけ多く説明することのできる第2因子を求めるといように順次、解を求めていくのであるが、そのさいどこまで因子を出していくのかということが問題となる。ここでは SPSS のプログラムにしたがって固有値 (Eigenvalue) が1.0以上のものを因子として取りあげ、因子負荷量 (各変数の因子に対する「重み」) を算出している。

以上のような手順で行なった因子分析の結果は表1のとおりである。

この結果は、通常の因子分析のそれとは大きく異なったものであることがわかる。それは、ほとんどの諸項目が第1因子と、ある程度の因子負荷量を示すことになっているということである。し